武蔵野日曜集会

約束・律法・福音

――ガラテヤ書第３章――

１９７５年12月７日（武蔵野）
小池辰雄

啓示の事実　体聴即信受　御霊の根源現実　賜りたる無　約束の根拠　わが信によりて　御霊の約束　御霊の翼で空中を飛ぶ　契約と約束　御霊をもって一つ　御霊の舵　自然法と霊法

【ガラテヤ3】

1愚かなる哉、ガラテヤ人よ、十字架につけられたまいしままなるイエス・キリスト、汝らの眼前に顕されたるに、誰が汝らを誑かししぞ。2我は汝等より唯この事を聞かんと欲す。汝らが御霊を受けしは律法の行為に由るか、聴きて信じたるに由るか。3汝らは斯くも愚なるか、御霊によりて始まりしに、今肉によりて全うせらるるか。4斯程まで多くの苦難を受けしことは徒然なるか、徒然にはあるまじ。5然らば汝らに御霊を賜いて汝らの中に能力ある業を行い給えるは、律法の行為に由るか、聴きて信ずるに由るか。6録して『アブラハム神を信じ、その信仰を義とせられたり』とあるが如し。

7されば知れ、信仰に由る者は、是アブラハムの子なるを。8聖書は神が異邦人を信仰に由りて義とし給うことを知りて、預じめ福音をアブラハムに伝えて言う『なんじに由りて、もろもろの国人は祝福せられん』と。9この故に信仰による者は、信仰ありしアブラハムと共に祝福せらる。10されど凡て律法の行為による者は詛の下にあり。録して『律法の書に記されたる凡ての事を常に行わぬ者はみな詛わるべし』とあればなり。11律法に由りて神の前に義とせらるる事なきは明らかなり。『義人は信仰によりて生くべし』とあればなり。12律法は信仰に由るにあらず、反って『律法を行う者は之に由りて生くべし』と云えり。13キリストは我等のために詛わるる者となりて律法の詛いより我らを贖い出し給えり。録して『木に懸けらるる者は凡て詛わるべし』と云えばなり。14これアブラハムの受けたる祝福のイエス・キリストによりて異邦人におよび、且われらが信仰に由りて約束の御霊を受けん為なり。

15兄弟よ、われ人の事を籍りて言わん、人の契約すら既に定むれば、之を廃し、また加うる者なし。16かの約束はアブラハムと其の裔とに与え給いし者なり、多くの者を指すごとく『裔々に』とは云わず、一人を指すごとく『な

んじの裔に』と云えり、これ即ちキリストなり。17然れば我いわん、神の預じめ定め給いし契約は、その後四百三十年を歴て起こりし律法に廃せらるることなく、その約束も空しくせらるる事なし。18もし嗣業を受けること律法に由らば、もはや約束には由らず、然るに神は約束に由りて之をアブラハムに賜いたり。19然れば律法は何のためぞ。これ罪の為に加え給いしものにて、御使たちを経て中保の手によりて立てられ、約束を与えられたる裔の来らん時にまで及ぶなり。20（中保は一方のみの者にあらず、然れど神は唯一に在せり）21然らば律法は神の約束に悖るか、決して然らず。もし人を生かすべき律法を与えられたらんには、実に義とせらるるは律法に由りしならん。22然れど聖書は凡ての者を罪の下に閉じ籠めたり。これ信ずる者のイエス・キリストに対する信仰に由れる約束を与えられん為なり。

23信仰の出来らぬ前は、われら律法の下に守られて、後に顕れんとする信仰の時まで閉じ籠められたり。24斯く信仰によりて我らの義とせられん為に、律法は我らをキリストに導く守役となれり。25されど信仰の出来りし後は、我等もはや守役の下に居らず。26汝らは信仰によりキリスト・イエスに在りて、みな神の子たり。27凡そバプテスマに由りてキリストに合いし汝らは、キリストを衣たるなり。28今はユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自主もなく、男も女もなし、汝らは皆キリスト・イエスに在りて一体なり。29汝等もしキリストのものならば、アブラハムの裔にして約束に循える世嗣たるなり。

●啓示の事実

ガラテヤ書3章、

1愚かなる哉、ガラテヤ人よ、十字架につけられたまいしままなるイエス・キリスト、汝らの眼前に顕されたるに、誰が汝らを誑かししぞ。

パリサイ中のパリサイであったパウロがダマスコ途上でキリストにひっくり返されて、この律法の世界から福音の世界に、彼は180度の展開をしたわけです。その中心は何といっても、十字架の贖罪であるので、パウロにとってはこの、

「十字架につけられたまいしままなる」

という表現は非常に深い表現であるわけです。キリストの十字架というのは、これはヘブル書9章、10章にも書いてあるとおり、

「ただ一回、手にてつくらぬところの至聖所に入りて」

とありますが、これはゴルゴタの十字架のことです。それで、その贖罪を果たしたまえりと。よく、「歴史的」ということをいいますね。歴史的と言いましても、普通の歴史は相対的な歴史なんです。相対的な歴史の事実としての十字架をもし言うならば、それは

「宗教的天才が殉教の死をとげた」
でおしまい。けれども、そういったことではない。キリストの十字架は相対的歴史的な事実の奥に、啓示（けいじ）の事実として来ているわけです。
啓示の事実というものは単なる過去の事実ではないので、現在の事実であり、また歴史の終りに至るまでの事実として、我々に迫ってくる事実、問いかけている事実です。そうでないならば、啓示は関わりがない。啓示は我々に関わりを持たんとして現れたものです。
その啓示の関わりを持たんとして現れたものに、
「関わりなし」
と言うならば、これはもう信仰ではない。信仰ということは、これを関わりあるものとして受けとるということが信仰なんですから。関わりがあるということは、単に過去の
「そうですか」
ということではないので、
「現に自分にとって何であるか」
という、死ぬか生きるかの問題です。これが即ちこの十字架です。
この十字架は即ち、私たちの我執という根源的な罪を完全に贖いとった。過去完了の事態でありますが、それが啓示の事実であるかぎり、現在完了でいつも私たちにこのようにして迫っている。マルチン・ルターが
「クリスチャンの死に至るまで生涯を通して悔改めである」
と言った。常に新たにキリストに還（かえ）っていくことである。還ることが即ち前進することである。だから、私は、
「原始の福音に、使徒的信仰に立ち還れ」
と言う。いつも根源に還るということは前進することなんです。
根源的な事態は常に私たちに現在として迫っている。ゲーテの『神と世界』という詩集がある。そこでゲーテが、ゲーテの時代は、理性（フェアヌンフト）というものを非常に重んじたので、
「本当の理性をもっていると、過去・現在・未来というものを本当に掌握（しょうあく）することができて、それを現在化する。現在において本当の永遠がある。この瞬間が即ち永遠である」
というようなことを言ってます。そのゲーテが言っている「理性」は、ゲーテがまた別なところで、『ファウスト』の中で、
「理性は天界の光の影である」
と言って、メフィストーフェレスをしてこの理性を揶揄（やゆ）している、けなしている。
「『理性、理性』と言っているけれども、本当に理性を理性らしく使っているか」
と、メフィストーフェレスは言っている。もちろん、ゲーテはメフィストーフェレスをし

て劇の中で言わせているわけですが。カントが、

「人間は理性的存在である」

と言いました。それは確かにそうです。けれども、この理性が非常に間違っていることに動いている。それは欲と一緒に、欲とからんで、この理性がすっかり狂ってしまう。

「その理性を動物よりも動物的にあらんがために使っている。ダメではないか。神さまはそんなものを与えたって、人間はしょうがない」

というようなことを言って、メフィストーフェレスが人間をやっつけているわけです。

「知恵のあるところにいよいよ憂い多し」

なんて、伝道の書にもありますけれども。

その「理性」（フェアヌンフト）は、我々にとっては「霊」（ガイスト）なんです。御霊です。御霊のあるところには、本当に過去を――即ち、過去のキリストの十字架の事実は、啓示の事実は――現在として我々に御霊をもって本当に受けとる。

「信仰をもって受けとる」

ということと、

「御霊をもって受けとる」

ということは、そこでは同じことです。

●体聴即信受

そういうことで、

「十字架につけられたまいしままなるイエス・キリストを、この十字架の贖いを土台としていないで、お前たちはまた律法に帰るか、誰にたぶらかされたんだ」

と言って、巻き戻しをかけているわけでしょ。パウロはせっかくガラテヤの諸教会に福音を語ったのに、また律法に戻ったから。

2 **我は汝等より唯この事を聞かんと欲す。汝らが御霊を受けしは律法（おきて）の行為（おこない）に由るか、聴きて信じたるに由るか。**

まさか律法の行為ではあるまいと。パウロ自身が律法の行為をさんざんやりました。それで立派でありました。自分でもそう思っていた。ところが、それは御霊が来なかった。いよいよ頑（かたく）なである。そして、キリストを迫害した。クリスチャンを迫害した。ところが、

「私はキリストにひっくり返されたから、そして、御霊を受けたので、初めて福音に突っ込んだ。御霊を受けたのは、私がお前さんたちに語ったのを聴いて、それを受けとったのによったのではないか」

と。「聴きて信ずる」ということで、

「御霊を受ける」

と、パウロは簡単に言ってます。ところが、「聴く」というやつが、耳で聞いている聞き方

が多いわけだ。耳で、頭で聞く。しかし、本当に聴くとは体で聴くこと、「体聴」という。体聴なんていう言葉はないですよ。ないけれども、しょうがないです、福音の真理はそう言わなければ。やっぱり漢文はありがたい。漢文だのドイツ語は、構成できるから。

体で本当に聴き受けとった。体聴することが本当に受けとるということで、これは体聴即信受ということになる。福音は力を持っていますから、これを体で受けとると御霊がやって来るということをパウロが率直に言っているわけです。

3 汝らは斯くも愚なるか、御霊によりて始まりしに、今肉によりて全うせらるるか。

御霊によって始まったものを、今、肉によって全うせられるかと。「肉」というのは、生まれつきの人間の理性や悟性や感情や意志や、そういう生まれつきの側の能力のことです。それがどんなに良さそうにみえても、それを「肉」という。それで全うされるのかと。

4 斯程まで多くの苦難を受けしことは徒然なるか、徒然にはあるまじ。5 然らば汝らに御霊を賜いて汝らの中に能力ある業を行い給えるは、律法の行為に由るか、聴きて信ずるに由るか。

ここにも書いてある。

「御霊を賜いて汝らの中に能力ある業を行い給える」

と。聖霊が来れば、何かしらんけれども、力が働く。いわゆるカリスマ的力が。根源現実が本ものであると、それが現象するわけだ。

「御霊を受けとったら、御霊は力を持っているから、それが現れるのは当然ではないか」

と。

●御霊の根源現実

こないだ、私が、

「本ものの信仰」

と言ったときに、この「能力ある業」を、即ちカリスマという現象面ばかりを追い求めていると、これがまたおかしな信仰になる。私が「本ものの信仰」と言ったのは、

「力ある業が現象しようが現象しまいが、いつも一番根源のところが本ものである。根源現実が本ものである」

ということ。人間はそれぞれ癖があったり、欠点があったりします。人間の癖だの欠点だの、そういうところを見て、枝葉を見て、

「あの人はクリスチャンのくせにどうだこうだ」

なんてよく言います。勝手に言わせておけばいいですよ。

その奥の世界です。奥の世界に本ものが来ていれば、そういった余計なものは、枯れ葉

が落ちていくように落ちていく。そんなものは気にしなくていい。また、本ものがあれば、今度は新しい芽を吹いて、現象を起こす。花が咲いて果が実る。

それは自由なんです。神さまの御意に従って、自由自在にその現象が出てくるわけです。問題は、どのような運命環境であろうとも、また、自分がどうであろうとも、そういうことに関わりなく、

「いわゆる自分の信仰でも何でもありません。私の中には本ものがあります」

という事態が、これが御霊の根源現実と私は言いたい。「ウルヴィルクリッヒカイト」です。これは絶対恩寵の世界ですから、自分がどうするこうするではない。絶対恩寵に圧倒されている世界です。贖罪の十字架のキリストが常に根底に立ち、そこには必ず御霊の現実があります。贖われて無の状態になったから、私は「無者」と言う。無者は無者即無限無量者なんです。無者即無限無量者とは即ち、十字架即復活聖霊の事態。これが本当に掴まれているか。本当に受けとってるか。それだけです、問題は。

あなた方は、私からしょっちゅう聴いているから、

「またか」

と思うかもしれない。けれども、「またか」ではないよ。私は語りながら常に新たに中へいよいよ深く入っていくだけの話。私の書いたものはみんなには、

「万人向けに書いた」

と言ったって、この気合を本当に読みながら受けとらなければ、これは正直、私の本は読めない。水を割ってないから。水を割っていわゆるわかりやすくなんて書いてないですから。けれども、なにもことさら難しく書いているのではない。

今度は私は頼まれて、「私と読書」というのをキリスト新聞に書きましたから、どうぞ読んでください。その原稿を見て、キリスト新聞の人が感激して驚いていた。まぁ、この聖霊の世界に来たら、何とも言えないですよね。だから、もういかに違うか、次元がズレているかということを、あなた方は少しそういうところに行ってみて話してみると分かる。

ここの集会が交通ストで来れないときに、別な近所の教会へ行ってみましたか。そうすれば分かるから。もう、どういうところへ行ったって、絶対に狂いを生じないんですよ、この世界に入ってしまうと。ちゃんとオリエンティーレン（方向づけ）ができるんです。

「まだちょっと、あそこへ行って囚われるといけないから」

なんてね、そんなのはまだ本当の御霊が入ってない。もう、御霊の世界に来たら、どこへ行こうが、何を読もうが、全部これを掌握してしまう。まぁ、まだ若い方々はそういきなりちょっとそうはいかないでしょうし、また、あんまりいったつもりでいるのも困るけれどもね（笑）。それはまぁ、順番もありますけれども。私は決してうそは言ってませんから。

●賜りたる無

パウロが、そういった力ある業が出てきたのは、

「御霊を賜(たま)いて」

という。しかしながら、普通、御霊を賜ってちっとも力ある業(わざ)が出てこないのもあるし、それから、立派な信仰と思われても、一向その業が出てこない。これは無教会がそうだった。私は『無者キリスト』に、もちろん内村鑑三、藤井武、塚本虎二先生方に感謝の意を表して、題字のところに「捧ぐ」と書きましたけれども、それはそれぞれの意味をもって言っているだけの話で、この御霊のことになると、何といっても、無教会は十字架のこっち側です。十字架の向こうへ突き抜けていない――「いない」と言っては言い過ぎかもしれませんけれども――とにかく、ちょっと突き抜けたかと思うと、またこっちへ戻ったりしている。

そういうことで、皆さんは、この聖霊の事態です。この

「聴きて信ずる」

ということを、パウロがどんなに深い気持で言っているかということです。身体で聴いてないから。日蓮が、

「法華経を身体(からだ)で読め」

と言ったでしょ。福音は身体で聴いていなくてはいかん。全存在で聴いていなくてはいかん。

6 録(しる)して『アブラハム神を信じ、その信仰を義とせられたり』とあるが如し。

アブラハムは神さまの言葉を聴きました。

「お前の子孫はこの空の星のようになるぞ」

と。これを無条件に受けとってしまった。これが「聴いて信じた」ということ。アブラハムは神の声を聴いて、それをそのまま受けとって、自分の肉の判断を全部乗り越えてしまった。そしたら、「よし」と言われた。

「その信仰を義と認められた」

という。

「その信仰をよしとされた」

でいいんだよ、「義」なんて難しいことを言わなくたって。

「アブラハムは神にアーメンと言いました」

ということです、「信ずる」とは。

「神さまにアーメンと言う」

のは、「信ずる」というのは、自分に対して「否(いな)」と言うこと。神さまに「然(しか)り」と言うときには、自分に対しては「否(いな)」。自分の判断一切を否定してかかる。そういう気合が分かるでしょうね。

「私だって少しは分かっているんで、自分を否なんて言う、否むことはいりません」

なんてダメですよ、そんなことで生かしたら。相対的自分なんてものは捨ててかからないと。

そうすると、絶対恩寵の素晴らしい世界に入る。その捨ててかかれないのが「罪」なんだから。ところが、

「お前のその捨ててかかれない、その気持はちゃんと私が十字架で捨ててしまったんだよ」

というのが、この十字架なんですから。「ああ、そうでしたか」と、ガタリと気がつかなくては。

「なかなか、捨ててかかると言ったって、捨てられません。無になれと言ったって、無になれません」

と。なれないよ、それは。自分で無になれるなんて、私はひとつも言ってない。キリストが賜りたる無なんだから。賜りたる無、賜りたる無即無限無量。全部これは賜りたるものです。

あなた方、空気を自分で造って、吸ってますか。これは賜りたる空気ではないですか。自然界の一切のものは、これはみな賜りたるものではないですか。肉体はこの空気を吸わないでいたら、参ってしまう。これは絶対恩寵に生きている。いわんや、魂の世界も賜りたる世界なんです。

どうして、もっと人間は、今の人は簡単になれないんだろうか。頭が良すぎるのかね。私みたいにバカにならなくては。大愚にならないといかん、大馬鹿三太郎に。大愚は童心なんです。幼心（おさなごころ）です。

「童心、幼心を持たなければ天国に入れない」

と、キリストが言われたのはその消息です。私がなぜ若いかというと、そういう童心でいるからです。ところが、この童心が強いんですよ、権謀術数よりも。

偉大なる政治家は本当は単純なんです。グラッドストーンでも、リンカーンでも、西郷南洲でも。政治家あたりも、宗教的な霊的な人物が出てこなければダメなんだ。そういう人物を出すためには教育が大事です。教育者が宗教のことをそっちのけだから、日本の教育はどんなに制度を良くしようが何をしようが、決して良くはならない。だから、私は言うんですよ、校長会でも。

「どうですか、皆さん、校長先生方は山に籠もって瞑想して祈ったらいかがですか」

なんて言うもんだからね。二千人を前にして、私はそういうことをはっきり言う。御霊の権威は、これはもうしょうがないです。自分の主観や自分の信仰でなんかでものを言っているのではないから。

●約束の根拠

アブラハムはそのようにして、神さまに、

「はい」

と言った。そうしたら、

「よし」

と言われた。これが即ち、神さまに「はい」と言って、縦の関係がピシャッと立っているのを「義」という。こんなに、義ということがはっきりしているのに、義という言葉を何か非常に難しく考えているんだよね。そして、硬直状態になっている。

「義、義、義」

なんて。義とは何と楽しい言葉ではないですか。力強い言葉ではないですか。その義の事態が即ち平安なんです。

「平安、汝にあれ」

というこの平安というのは、その縦の関係が、

「はい、アーメン」

という関係が立っているところに平安がある。力がある。平安は力を持っている。

7されば知れ、信仰に出る者は、是アブラハムの子なるを。8聖書は神が異邦人を信仰に出りて義とし給うことを知りて、預じめ福音をアブラハムに伝えて言う『なんじに出りて、もろもろの国人は祝福せられん』と。9この故に信仰による者は、信仰ありしアブラハムと共に祝福せらる。

そこで、アブラハムに神さまは、もろもろの国人を祝福するという約束を与えられた。何がその約束の根拠となっているかというと、その約束の根拠となっているのは、アブラハムのこの信なんです。この信の土台に約束がある。信仰の土台に約束がある。「約束」はギリシャ語では「エバンゲリア」という字です。

10されど凡て律法の行為による者は詛いの下にあり。録して『律法の書に記されたる凡ての事を常に行わぬ者はみな詛わるべし』とあればなり。11律法に出りて神の前に義とせらるる事なきは明らかなり。『義人は信仰によりて生くべし』とあればなり。

律法は、これは何ですか。律法はモーセに与えられた。モーセに与えられた律法というのは、

「私はお前の神であり、お前たちイスラエルは私の民である」

という。この関係を立てていくために、

「これこれを守れば、この関係は立つ」

と言って、モーセを通して――ここには「契約」という言葉はないですが――この契約の徴として律法を与える。「契約」という言葉も大事な字です。新約聖書、旧約聖書のこの「約」の字が、ギリシャ語で「ディアテーケ」と言う。新しき契約、旧き契約。旧き契約は即ち律法が土台となっている。新しき契約は福音が土台となっている。

「律法を行わない者はみんな詛われる」

という。即ち、律法を本当に守れなければ、これはのろわれる。即ち滅びに至る。キリス

トが十字架に架かったのはこの詛いです。詛いの罪を受けて、詛いの極致がこの十字架なんですから。そいつを全部引き受けたというのが、ヘブライ的な考え方、言い方なんです。

●わが信によりて

11節に、

『**義人は信仰によりて生くべし**』**とあればなり**。

とある。これはハバクク書2章4節にある。ところが、旧約聖書の七十人訳ギリシャ語聖書によると、この

「**義人は信仰によりて生くべし**」

のこの「信仰によりて」という言葉は、

「**わが信によりて**」

と書いてある。「わが信」というのは、神さまの

「私の信で、私の信によって、義人は生きる」

ということ。逆に言うと、

「私の信に生きる者が義人である」

ということです。「信仰によって」を特に「わが信」と書いてあるんだな。神さまは私たちの不信にもかかわらず、信じぬいてくださる。それを、

「わが信を受けとって生きる者が義人である」

と。正にその通りです。あの言葉は、掘り下げると、アブラハムへの言葉よりもなお深い言葉になる。

「神さまの本願で生きる。本願を受けとる者は義とされる」

ということ。「信仰によって義とされる」は、アブラハムが「はい」と言ったら義とされたんだけれども。

「神さまのこちらに対する本願を受けとる者は義とされる」

ということになると、もうひとつ深い消息になる。

アブラハムが神さまを信じたのは、神さまがこんな圧倒的な方であるということを受けとるという――その本願は隠れていて、あまり前面には出てないけれども――「わが信」となったら、

「わが信によりて生くる」

という本願式な言い方になる。こないだやったでしょ、

「キリストを信ずる信仰ではありませんよ。キリストの信によって生くる」

と言ったでしょ。あれは「キリストを信ずる信仰」なんて書いてないんだから、ギリシャ語では。

「キリストの信によって生くる」

という、「キリストの信」というものが主体なんです。そこから今度は、「キリストを信ずる」という客体が出てくるけれども、元はキリストが主体である。キリストの信が主体である。キリストの信によって生きる。キリストの信を受けとることによって生きる。こちらの信仰なんていうものを当てにしたら始まらないよ。キリストが、

「信仰うすき者よ」

なんて言うから、

「さぁ、自分の信仰を当てにしよう」

と思って一生懸命で深くしようと思う。キリストのあの言葉は躓きになるね。

こういうことをはっきり言ってくれる人がいないのかね、牧師さんは。だから、みんな何かこだわったような妙な信仰になってしまうんだ。もっと突き抜けなければダメですよ、自分なんてものを。キリストの信に、

「はい、あなたの信なら、もう問題はありません。私はガタガタであろうと、雲のように千変万化しようと、そんなことには関わりません」

と言うと、本当の磐石になるんです、こちらが。磐石にされてくる。自分の信仰状態だとか、心理状態だとかを問題にして、

「今日はちょっと調子悪いから、集会はやめておこう」

なんて、冗談言っては困る。調子の悪いときほど来てくれなくては。この頃見えない方があるけれども、どうしていらっしゃらないかと私は思う。あなた方は友情があったら、本当に引っ張って来なさいよ。ここの集会は一回ごとに前進しているんだから。来ないと、後退しちゃうよな。だてや形式で私は集会をしてないんだから。

この本願の角度を、本願に圧倒されながら生きる。私はこういうことを言うと、自分の胸の中にはもう異言が来ている。爆発しそうになる。

「信仰によりて生くる者が義人である」

と、ひっくり返せばいい。「義人は信仰による」なんていうと、

「私は義人でないから、なかなかこれは大変だな」

なんて思う。そんな読み方をされては困る。だから、私はもっと大胆な新約聖書を書きたいんだよ、時間があれば。

「ギリシャ語でそう書いてないじゃないか」

なんて言われても、いいよ。

「そのギリシャ語の奥を私は読んでいるんだ」

と言ってやりたい。語学のできる人は、言葉のテンスやそんなことにばかり関わっている。ちょっと塚本先生はそういうところがあったね。そういった厳密ばかりやっているものだから、塚本先生が翻訳しても、またその推敲を重ねようとして、とうとう生きていらっしゃるうちに新約聖書を出せなかった。あのやったままを出せばよかったんだ、先生は。そ

して、後からどんどん変えればいい。
マルチン・ルターは――私の持っているこの初版の聖書――これは後、版を重ねるごとにいろいろまた変えているんです。ところが、この初版はまた初版で非常に価値があるから。この聖書を持っているのは、日本におそらくいないのではないかな。このルターの言葉を読んでいると、本当にルターの肉声を聴くような気がするからね。

●御霊の約束

12 **律法は信仰に出るにあらず、反って『律法を行う者は之に出りて生くべし』と云えり。**

と書いてある。本当に律法を行った者はキリストだけです。そして、キリストは本当に生きている。律法を、律法の奥の福音を読んでいるわけだ。
「律法の奥に福音が隠れている」
とまでは、パウロは言わなかったけれども。
キリストの言葉を見てみなさいよ。
「何々すべし、すべからず」
とキリストも言っているよね。
「では、律法ではないか」
と。そうじゃない。決して然らず。「すべし、すべからず」のキリストの言葉の奥には、
「私がさせてやる。私に来てごらん、できるぞ」
という言葉が隠れている。キリストの福音もちょっと外側は律法みたいな言い方をしている。
「幸いなるかな。霊の貧しき者、天国はその人のものなり」
と。さて、誰が霊が貧しいか。霊が貧しくなれないではないか。霊が無とはならない。それはキリストが、
「私が十字架によって、お前の魂をすっかり貧しくしてやった。自我からはずしてやった。そしたらば、天国即ち聖霊の我がお前の中にいる」
と。誰がそういう読み方をしましたか。これは『無者キリスト』にも書いてあるでしょ。だから、私は
「この一巻の書は私のアルファでオメガである」
と、かつて申しました。
13 **キリストは我等のために詛わるる者となりて律法の詛いより我らを贖い出し給えり。**
正にその通り。律法を行えない私たちのために、詛いをキリストが受けた。
録して『木に懸けらるる者は凡て詛わるべし』と云えばなり。14 **これアブラ**

ハムの受けたる祝福のイエス・キリストによりて異邦人におよび、且(かつ)われらが信仰に由りて約束の御霊を受けん為なり。

「約束の御霊」と訳しているけれども、ギリシャ語は本当は、「御霊の約束」なんだ。逆に書いてある。まぁ、「約束の御霊」でいいですけれども、原文は逆になっている。

15兄弟よ、われ人の事を籍(か)りて言わん、人の契約すら既に定むれば、之を廃し、また加うる者なし。16かの約束は

創世記12章、15章、22章です。かのアブラハムに言われた約束は、

アブラハムと其の裔(すえ)とに与え給いし者なり、多くの者を指すごとく『裔々に』とは云わず、一人を指すごとく『なんじの裔に』と云えり、これ即ちキリストなり。

「アブラハムの子、ダビデの子」というあの「子」という言い方がこの「裔(すえ)」だ。マタイ伝1章1節だ。アブラハムの裔。「子」と言おうが、「裔」と言おうが同じこと。正に、「後から来る者」です。

17然れば我いわん、神の預(あらか)じめ定め給いし契約は、その後四百三十年を歴(へ)て

まぁ、そういうように勘定したわけだ。シナイ山でモーセに与えられたもの。

起こりし律法に廃せらるることなく、その約束も空しくせらるる事なし。18もし嗣業(しぎょう)を受けること

「嗣業を受ける」というのは「神の子とされる」ことです。このことが、

律法に由らば、もはや約束には由らず、

律法に由るというわけならば、もはや約束ではなくなる。約束にはよらなくなる。

然るに神は約束に由りて之をアブラハムに賜いたり。19然れば律法は何のためぞ。

罪のため。罪の罪たることが分かるためです。

これ罪の為に加え給いしものにて、御使たちを経て中保(なかだち)の手によりて立てられ、

これはモーセという中保(なかだち)ですよ。

約束を与えられたる裔(すえ)の来(きた)らん時にまで及ぶなり。

即ちキリストの、

アブラハムに約束されたことは貫いている。律法があろうが、一向そんなことは関係ない。律法が来たからといって、約束がどうかなったのではない。なぜかというと、約束というものはこの信仰を土台としているでしょ。信仰を土台としているんで、キリストを受けとることがやはり信でしょ。だから、この約束の裔は、約束の実体は、福音であるわけです。信仰の筋道には福音が来ることが約束されているわけです。その福音の主体はキリストで

ある。

●御霊の翼で空中を飛ぶ

信仰を貫けばいいさ。ところが、どうも、信仰を貫くことができないんだよね、これが事実。約束は廃(すた)れない。だけれども、信仰はどうもぐらつく。本当に信じて生きることのひとつの、何と言いますか、神と民とのその信の関係を貫くかどうかということを律法が試しているわけだ。そうすると、律法がひとつの規準ですから、信の関係のひとつのレールだから。このレールがあったのがいいか悪いかは知りませんよ。しかし、このレールがなければ困るけれども。

信の関係は本当は、空中を飛ぶ。御霊の翼で空中を飛んでいれば一番いいんだ。ところが、これは地上ですから、地上を歩くには軌道がある。それでなければ、自動車はぶつかってしまう。自動車が歩くにもいろいろ規約がある。それと同じで、人間関係にもいろんな規約がなくてはいかん。神さまとの関係も、ちゃんと縦の規約と横の規約がある。これが十誡ですね。そういった道筋をちゃんと律法が示したわけです。

だけれども、この道筋にこだわることはなかったはずなんです。こだわることはなくて、信仰をもってこの律法を受けとっていればよかった。信仰を土台として律法を受けとっていればよかったけれども、この信仰が土台とならない。そして、律法にこだわってしまった。律法にこだわってしまったものだから、それで却って、これに躓いてしまっている。却って、罪がいよいよ現れてしまった。歴史的な事実はそういうわけです。

「殺すなかれ」

と言う。信の世界なら、殺人はないわけなんだ。けれども、いろんな現実を見ても、どうもうまくない。だから、「殺すなかれ」という律法が現れてきた。「殺すなかれ」という事態を具体的に本当に受けとるためには、この信を土台として律法を受けとらなければならなかった。律法を、信を土台として受けとるならば、その律法を全うする。

即ち、キリストを信ずることによって――信仰の世界ではキリストが律法を全うしたから――我々は律法に縛られないということになった。手放しの信仰は、やってみたところがダメだった。

そうすると今度は、キリストを信ずる、キリストという事態、福音の事態が来て、これを受けとることによって――旧約の信仰でない新約の信仰はそれにおいてキリストを受けとってますから――律法を全うしたキリストが律法の「テロス」「終末」となったところの、またこれを全うしたところのキリストを受けとることによって、我々は律法から自由になった。

「クリスチャンの自由」

というのが、そのことです。パウロが言っている福音の自由はそれです。

「御霊の在るところに自由あり」

というのは、信において聖霊が来てますから。そういう関係です。

●契約と約束

17然れば我いわん、神の預(あらか)じめ定め給いし契約は、その後四百三十年を歴(へ)て起こりし律法に廃せらるることなく、その約束も空しくせらるる事なし。18もし嗣業(しぎょう)を受けること律法に由らば、もはや約束には由らず、然るに神は約束に由りて之をアブラハムに賜いたり。19然れば律法は何のためぞ。これ罪の為に加え給いしものにて、御使たちを経て中保(なかだち)の手によりて立てられ、約束を与えられたる裔(すえ)の来(きた)らん時にまで及ぶなり。

この「契約」という言葉は、「約束」と同じ気持でここに使ってあるわけです。「約束」がギリシャ語では「エバンゲリア」で、「契約」は「ディァテーケ」です。この「エバンゲリア」という言葉も、約束からやはり、「然りと言う」ところの内容の事態です。ちょっと似た言葉に、「ユウアンゲリオン」という言葉があるでしょ。「エバンゲリア」は「約束」ですが、「ユウアンゲリオン」は「福音」。これは「善き音信」あるいは「喜びの音信、約束ないし契約」と言われている事態です。

イスラエルの民は「契約の民」と言われている。それはモーセの十誡によるところの契約の民です。アブラハムの約束がこの律法によって、

「律法を守れば、いよいよ神と民との関係は、契約は成り立っていく」

という。だから、「契約」と言うときには、旧約的な神とイスラエルの関係において特に「契約」なんです。「約束」となると、それがもうひとつ乗り越えて、万民に向かっていく。そして、新約になると、新しき契約は、その万民に向かっているところの約束と同じことになる。こういうわけです。

20（中保は一方のみの者にあらず、然れど神は唯一に在(いま)せり）21然らば律法は神の約束に悖(もと)るか、決して然らず。もし人を生かすべき律法を与えられたらんには、実に義とせらるるは律法に由りしならん。22然れど聖書は凡ての者を罪の下に閉じ籠(こ)めたり。これ信ずる者のイエス・キリストに対する信仰に由れる約束を与えられん為なり。

23信仰の出来(いできた)らぬ前(さき)は、われら律法の下に守られて、後に顕れんとする信仰の時まで閉じ籠められたり。24斯く信仰によりて我らの義とせられん為に、律法は我らをキリストに導く守役(もりやく)となれり。

家庭教師みたいな「守役」となった。奴隷がよく貴族の息子やなんかを教育的に訓練するのを「守役」と言っていたわけです。「パイダゴーゴス」という字です。教育という字が「ペダゴギー」でしょ。あれは「パイダゴーゴス」「守役」という字から来ているわけです。い

ろいろ訓練して、トレーニングする人が「パイダゴーゴス」「守役」という字です。

25**されど信仰の出来(いできた)りし後は、我等もはや守役(もりやく)の下に居らず。**

実は、信仰は始めから来ているんです。けれども、キリストへの信、キリストからの信が来たら、もはや守役の下にはおらず、

26**汝らは信仰によりキリスト・イエスに在りて、みな神の子たり。**

この「在りて」がまた強いですね。

「信仰によりキリスト・イエスに在りて」

と言うときは、御霊がなければ、この「在りて」は空言になってしまう。

●御霊をもって一つ

ヒルティという人が、「より強度なキリスト教」という論説を書いている。これは『新書簡集』の第４番目のものです。これは私は、『提言』の中の「ヒルティ」の項の第19回目に書いておいたんですけれども。そこでヒルティがはっきり、御霊のことを言っている。この「より強度なキリスト教」というのは、ヒルティの書いたものの中でも傑作の一つだ。今のキリスト教が、そういう意味において、気が抜けていることを書いている。

「キリストに在りてみな神の子である」

と。

27**凡(およ)そバプテスマに由りて**

およそ御霊のバプテスマによりて、

キリストに合いし汝らは、キリストを衣(き)たるなり。

衣のように着てしまっていると。

28**今はユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自主もなく、男も女もなし、汝らは皆キリスト・イエスに在りて一体なり。**

そういった相対的な区別はありますよ。だけれども、そんな相対的区別のもうひとつ奥には、もう相対的な区別のない事態である。ということは、

「キリスト・イエスに在る」

ということは、御霊をもって本当にそうである。このバプテスマのことは、ロマ書６章に非常に詳しく書いてある。「御霊に在って」はロマ書８章。一つになってしまう。

「自由・平等」とか何とか言うけれども、神との関係において一番根底は、

「御霊をもって一つである」

ということ。私たちの身体は、頭のてっぺんから足の先まで血が通っています。生命がある。血は生命のあるところ。どこを切っても血が出ます。そのように、身体では手でも足でもどこでも、耳でも、全部共通しているものはこの血である。ところが、キリスト教の群、交わりは、どこ人であろうとも、クリスチャンであるということの共通なものは何かとい

うと、「信仰」ではない。御霊なんです。
御霊を持っていなかったならば、
「私の信仰はこうだ。なんだかんだ」
と、すぐ信仰箇条的な信仰の争いをやる。
「そんな信仰は間違っているの、間違ってないの」
と、そんな世界ではないんです。もうひとつ奥の世界、御霊の世界です。十字架の贖いを通して、本当に贖いを通せば――十字架ということは全世界のキリスト教はやっているけれども――それはただ思い込んだってしょうがない。それは十字架という観念では一つです。観念で一つであったってダメなんです。その奥の世界の聖霊の世界に来ると、こればっかりは実質の世界ですから。体験するまでは、体受するまでは、どうにもならん。

●御霊の舵

ところが、聖霊を受けても、
「あんた、一体、聖霊を受けたのに、どうしちゃったんだい」
なんてなことになる。いつかの素晴らしいクリスマスがあった。みんなの後ろに白い羽の天使が二人ずつ立った。私の後ろには七人いたという話ですけれども。天来の音楽を聞いたり、天国の花園を見たり、キリストの声を聞いたり、胸の悪い人は治ってしまって、足の悪い人は帰りは杖が要らないで帰ったという、大変なクリスマスでした。私は「聖霊の華」と題して書いたでしょ。
「けれども、現象に躓いてはいけませんよ」
と、私はちゃんと書いてます。ところが、現象に躓いてしまった。それだけの素晴らしい聖霊の華や果を受けとっていて、これに躓いた。御霊の体験をしながら、ダメなんだ。根源現実に来てないから。十字架を本当に受けとってないから。十字架をいい加減にしていると、霊的なものはみんな変になってしまう。
「だから、十字架が土台ですよ」
と言っている。パウロがいつも十字架を土台にしている。この驚くべき霊的な人物が決して十字架をいい加減にしてない。このパウロの構造をどう見ているか。
「御霊、御霊」
と言う連中は、十字架がいい加減になってみたり。
「十字架、十字架」
と言う連中は、ちっとも御霊が来てなかったり。どっちもダメですよ、根源において。「自分の信仰」なんて言って、自分を見ているうちはダメだし。
人間だから、躓いたり転んだりするよ。けれども、「どっこい」というものがはっきりある。それが、「どっこい」がなくて、道をそれてしまったり、

「もう、このへんで信仰はやめよう。聖書はもう飽きた」
とか、いろんなのがいるよ。それは結局、自分で自分を審いているだけの話です。
まぁ、どういうものを見ましても、どういうことを経験しましても、ちゃんとその位置づけができるような、もの凄い舵(かじ)を持っている。それは御霊の舵です。いいですね。ぜひとも、それに向かってくださいよ。間違いないですから。そして、何をやっても、それが本当に展開してきます。針仕事をやろうが、編み物をしようが、台所掃除をしようが、文学をやろうが、政治、経済、会社、何でも。何でも本当の知恵と力がそこに展開していく。それ以下のものではない。私がそれくらいの幅で聖霊のことを言うとね、
「なんだ、あれはちょっと誇大妄想ではないか」
なんて思う。そうではありませんから。まぁ、仕方がないよね。私は預言者ではないけれども、本当に受けとられるまでは時間がかかるさ。

●自然法と霊法

29 **汝等もしキリストのものならば、**
「キリストのもの」という。「教会」という言葉が「キリストのもの」という意味ですよ。「キリストのものならば」とは、「本当の教会ならば」ということだ。キリストのものならば、
アブラハムの裔(すえ)にして約束に循(したが)える世嗣(よつぎ)たるなり。
神の世嗣である。即ち、アブラハムの裔、即ち信仰の霊統を嗣いでいるものである。
信仰は、これは霊法です。律法、道徳法――カントが言っている道徳の法だ――それから、自然界の物理的法則、自然法――自然法則と言うかな、「自然法」というのは別な意味もありますけれども、これは自然の法則という意味です――みなこれが法則の世界です。これ（霊法）が一番凄いんだ、この次元が。
この法の世界を本当に身につけたイエスは律法を乗り越えてしまって、律法を満たしてしまった。律法を破りながら、律法を満たしているんです。ユダヤ人は、
「この野郎は安息日を守らないけしからん野郎だ」
なんて、キリストのことを言った。けれども、キリストは、
「我は安息日の主たるなり」
と言って、本当の意味で安息日を満たしてしまった。キリストは、静中の動、動中の静の境地を持っている。自然界の法則、物理界の法則もキリストは乗り越えてしまって、海の上を渉ったりする。波に
「鎮まれ！」
と言えば、鎮まってしまう。
みな、法則は大事なんです。だけれども、一番大事なのはこの世界（霊法）です。これは限りない。御霊の世界です。パウロがロマ書8章2節で言っている